

「取組むのは 知ってしまったから」

ふたむら もとき
二村 元基氏

SOLTILO株式会社 海外事業部
アフリカ統括マネージャー

「サッカーを通じて夢を持つことの大切さを伝えたい」をコンセプトに掲げた SOLTILO 株式会社で、アフリカにおける無償のサッカークリニックをスタートさせた二村元基さん。現役のプロサッカー選手でもある本田圭佑選手がプロデュースする SOLTILO 株式会社は、サッカースクールとプロサッカークラブの運営やスポーツ施設のマネジメントをしています。

新卒で大手企業に勤務後、青年海外協力隊員として2年間ウガンダに赴任し、帰国後の社会福祉法人での経験を経て、ビジネスの力で根本的な解決方法を探ることを決意しました。アフリカ統括マネージャーとしてケニア・ウガンダ・ルワンダの3カ国でサッカークリニックを立ち上げます。日本人コーチ2名を派遣し、年間1,000人以上の子供たちにサッカーに触れる機会を提供。この機会に、時間を守る、ごみはごみ箱に捨てるなどの社会性を身につけることも大切にしています。

サッカークリニックに参加する子供たちは、11～13歳までの男女、裸足やサンダルでサッカーをする子供もいます。ボールやユニフォームも貸出だけで終了後には回収し、プレゼントすることはしません。「モノをもらうという発想が子供たちにも無いし、モノをあげて喜ぶのは自己満足でしかない」。



- ・愛知県出身、幼少に父を亡くし母子家庭で育つ
- ・高校までサッカー部に所属し、大学時代にプロサッカークラブで働き、運営ノウハウを学ぶ
- ・中央大学を卒業後、株式会社アシックスに入社
- ・退職後にウガンダに青年海外協力隊として滞在
- ・その後、DV被害などに遭った母子家庭を支援する社会福祉法人に勤務
- ・2017年 本田圭佑選手がプロデュースするサッカースクールを展開している SOLTILO 株式会社 (2018年に HONDA ESTILO 株式会社から分社化) に転職
- ・アフリカで無償サッカークリニックの責任書としてプロジェクトを指揮する

機会がないゆえに自立への道が 閉ざされている子供たちをサポートしたい

2018年にコーチに認められ提携するアカデミーへ推薦されたのは1,000名中15名で、その中から入団を勝ち取ったのは5名。ケニア人のコリンズくんは、ガッツがあり、片道徒歩1時間半かけて、2週間のトライアルに挑戦し、費用が全くかからない特待生として入団できたことは周囲の想像をはるかに超えるものでした。

各国でのサッカークリニックの提携校の選定基準について問われると「ある程度信頼が担保されており、日本が関わる組織と提携する。例えば、ケニアでは日本人が運営に携わり、ルワンダではJICAの協力隊を3代受け入れているような学校と戦略的に提携する」と言います。行く行くは地域での評判が広まって、地元のNGOから声をかけていただけることも見越してまずは数を重ね、着実な活動にしていくことに重点を置いています。提携校との継続性については「彼らとずっと手を組んでいくのかということと変わっていく可能性もある。なぜかということ、子供たちの数が限られているから。僕らは、同じ子供たちをずっと教える気持ちはなく、一人の子供に対して、週に1回2時間のレッスンを1ヶ月間は必ず受けられ、8時間かけて子供たちのスキル、ポテンシャル、人間性を見る。そこで人間性もよくポテンシャルもあんなら次のアカデミーに推薦するという仕組み」多くの子供たちに機会を提供するため、別組織との提携も念頭に将来性や継続性を重視しています。

「確率論だけでみると、入団を決めた5人中、プロサッカー選手になれるのはゼロに近い。けれど、プログラマーや料理人になれるのは1,000人に1人ですか」と投げかけ、改めて「ひとりでも多くの子供たちが自分の力で人生を切り開くこと」の重要性を強調し「2019年はスポンサー企業の力も借りながらサッカー選手以外のキャリアの提供も出来るようにしたい」と今後の展開を示してくれました。



センパイからの助言

Q、子供たちに機会の提供をするという今の仕事に就こうと思ったきっかけを教えてください。

A、サッカーの経験、英語、アフリカ滞在経験の3点から強みを活かせると思って入社した。なぜ、この事業かということ、アフリカに展開するとき、選択肢はいくつかあった。本田選手が本当にやりたいことを考えたら習いごとのサッカー学校ではなく、今の形態だと思った。世界の国々を豊かな順番に並べていったときにアフリカの多くの国はどうしても後ろの方になってしまう。そういった国々に住む機会に恵まれない子供たちにアプローチすることが彼の一番やりたいことではと考えたし、僕もそれがやりたかった。

Q、NPOなどではなく事業性を追求する企業の枠組みで取組む理由は？

A、NPOでもお金がないと運営できないと思う。こういった形態であれ、お金を稼ぐ・集めるということは避けられない。継続して取組むことが大事で本田選手にも厳しく事業性は問われている。「スポーツで世界を変えよう」といった大きな目標は立てておらず、出会った一番身近な子供一人に対して「自分の力でメシが食える」という意味での自立の道を開き、選択肢をひとつでも多く提供することを当面の目標としている。それを多くの子供たちに広げていきたい。取組むのはアフリカに行き、こうした子供たちの存在を知ってしまったから。それをやらないでいる生活は悶々とする。子供たちが成長していく姿を自分の好きなサッカーを通して見続けられるのはとても幸せなことだと感じており、やりがいに繋がっている。